

た6つの構成要素から成り立っている。今回、それぞれの過程の実施状況について学生にアンケートを行った。

その結果、歯科介護の課題分析では、項目数の多さから平均30分を要し、問題事項の選定および計画立案ではMDS-HC方式を応用したプロトコールにより10分という短時間で行うことができた。歯科介護の実施では、意思の疎通が図りづらい、要介護度の高い人ほど開口困難等の理由から、20分の時間を要した。実習記録では、決められた時間にまとめて記録を行うことで振り返りの時間がかかり、要した時間は平均20分であった。また、歯科介護全体の感想では、良かった点として、対象者に感謝される、要介護者の口腔内状況がわかるようになる、効果がありやりがいを感じる、コミュニケーション能力が向上するなどが挙げられ、困った点では、対象者の拒否、実施時間の確保、意思疎通の困難な対象者への対応などが挙げられた。

今後は、実習方法や結果に対する評価能力を向上させ、コミュニケーションの難しい対象者に適切な対応ができるように訓練するなどを課題とし、学生に指導していきたい。

介護老人保健施設における 口腔ケアの実践

河野雅之（附属歯科診療所Dr）

中山 恵（附属歯科診療所DH）

超高齢社会の到来で、要介護者や障害者に対する口腔ケアの重要性が認識されている。

そこで当診療所の訪問診療先である介護老人保健施設における口腔ケア実施状況の調査、口腔ケアに携わる職員に対しての意識調査を実施し、現状の分析と口腔ケアの問題点を明らかにし、よりよい口腔ケアの実施をする為の検討を行った。

入所者の口腔内の状況、職員へのアンケート結果をもとに口腔ケアに携わっている方への口腔ケアセミナーを行い、口腔ケアの重要性、口腔ケアに使う器具、方法などを理解してもらった。セミナー後入所者の口腔内は以前よりきれいになり、職員の口腔ケアに対するモチベーションも高くなった。

また口腔ケアに必要なタフトブラシや口腔乾燥症の方に必要なコンクールマウスジェルが施設の売場で購入できるようになった。

今後もセミナーなどを開いて多くの人に口腔ケアの重要性、方法を知ってもらい、入所者の方のQOL向上に努めていきたいと思う。

第66回（通算第149回）：2013年10月24日(木)

（座長：飛田 滋）

新しい熱可塑性ポリカーボネート 樹脂RQの研磨性について

佐野裕子（歯科技工士学科）

伊藤圭一（歯科技工士学科）

義歯床用強化ポリカーボネート樹脂SR（以下、SR）は、残留モノマーが溶出しないため、生物学的安全性や生体適合性に優れた歯科材料として長年使用されてきた。しかし、強化材成分の無機質フィラーの影響で、義歯の仕上げに重要な表面光沢を出す研磨性にやや難点があり、研磨作業性の改善が課題となっていた。このほど無機質フィラーを添加することなく、強度や耐疲労性などの力学的特性の向上を図った義歯床用ポリカーボネート樹脂RQ（以下、RQ）が上市された。そこで、新しいポリカーボネート樹脂RQと従来のSRの研磨性を比較する目的で、物理的試験として表面粗さ試験を、実用面から研磨作業性について官能検査を実施し検討した。その結果、表面粗さがRQはSRに比べて平均粗さ、最大粗さがともに約1/3に低下した。研磨作業時間は、RQはSRよりも荒研磨で22%、中仕上げで23%、仕上げで42%それぞれ短縮され、合計研磨時間では29%短縮された。さらに研磨面は滑沢な表面光沢が認められた。以上から、RQはSRの表面仕上がり状態の課題が改善され、研磨作業性が向上した新しい材料と考えられる。

新ポリカーボネート樹脂RQの特徴と 関連材料について

根岸政明（東伸洋行株式会社）

馬場勝也（東伸洋行株式会社）

従来の義歯床用強化ポリカーボネート樹脂では、歯科材料として強度を確保するために強化材を配合していたが、新しい床用樹脂を開発するに当たり、高い耐久性と耐薬品性を有するハイグレードの医療

系ポリカーボネートを選定し、義歯床用ポリカーボネート樹脂RQを完成、H25年4月に発売を開始した。保険適用となる新樹脂RQでは強化材を含んでいないため、研磨作業性の向上・透明感のある良好な審美性・しなやかな装着時のフィット感という特徴を持っている。

また、弊社の新しい関連商品として、熱可塑性樹脂では全ての材料で発生する成形収縮を補うため、0.6%の膨張率を有する高膨張石膏レイニングストーンHE、石膏型面に塗布して鏡面を得ることにより、成形後には義歯の表面に鏡面を転写させ、研磨作業の軽減および義歯と石膏の分離剤として機能する石膏型鏡面仕上剤ベースコートDC、軽量・コンパクトで低価格なエアースクエア熱可塑性樹脂成形器セレクトミニについて紹介した。

言語発達障害とことばクリニック

青木さつき（ことばクリニックST）

子どもの言語聴覚療法の原則は、主訴が「ことばの遅れ」であっても「発音が気になる」であっても、「発達レベルに合う指導内容」と「認知的特徴に合致する指導方法」であり、子どもの発達全般や背景を見ながら行う。言語聴覚士の領域は「スピーチ」だけでなく、「ランゲージ」「コミュニケーション」と広がっている。

「ことばクリニック」が歯科に併設されてよかったこととしては、①口腔内のことの相談ができる、②医療保険が適応できる、③療育センターより敷居が低い、④通いやすい診療時間である、⑤感染症をもらう可能性が低い、などがあげられ、とても好評であった。

しかし医療保険での診療には、すべての附属歯科診療所スタッフの協力が必要であった。

平成16年10月に開室した「ことばクリニック」は、12月末をもって休室することになった。それに伴い、たくさんの言語発達障害のある子どもたちが治療（支援）の場を失う。これまでの経験を生かし、歯科スタッフと言語聴覚士が協力できる場を考えながら、どこかで言語発達障害児の治療（支援）が継続・発展できるようご協力をお願いしたい。